

日吉台地下壕保存の会会報

第79号

日吉台地下壕保存の会

2006年度総会開催さる

敗戦から61年目の今年の本会総会は2006年6月10日(土)午前10:00より慶応義塾大学日吉キャンパス来往舎中会議室において開かれました。

「新たな戦争遺跡を作らない、戦争の実相を知るために戦争遺跡の保存を」という会に投げかけられた大きな課題を少しでも解決するため、昨年度の活動報告と決算、また今年度の方針とその裏付けとなる予算について話し合われました。昨年度の神奈川新聞社会事業受賞、ガイド養成講座開催、ガイドブックの発行という大きな取り組みを経て、ガイド養成講座の参加者の中から会の運営に参加して下さる方もできるようになりました。今年度中にも文化庁から戦争遺跡の詳細調査報告が出されるだろうという状況の中で少しずつ活動に広がりが出てきました。活動方針ではこれまでの「地下壕内の保存」から「地下壕及び関連施設」の保存に取り組むことが新たに確認されました。

総会后、学習会シリーズ「慶応日吉キャンパスの戦争遺跡を知る」第1回「図面から見た人事局地下壕」と題して本会副会長・戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員 新井揆博氏の講演がありました。霞ヶ関旧海軍省の当時の写真も公開され、これまであまり知られていなかった人事局地下壕を図面とスライドで見て、日吉台地下壕群の壮大な構造の一部が明らかにされました。

講演の要旨及び 総会で決定された事柄を以下に掲載いたします。



2006年度第18回日吉台地下壕保存の会総会

第18回日吉台地下壕保存の会 講演会・総会

○2006 年度第 18 回日吉台地下壕保存の会定期総会

10:00～10:30

総会次第

1. 開会の辞
2. 会長挨拶
3. 議長選出
4. 議事
 - (1) 2005 年度活動報告
 - (2) 2005 年度会計報告
 - (3) 2005 年度会計監査報告
 - (4) (1) (2) (3) の報告についての質疑応答及び承認
 - (5) 2006 年度 会長・副会長・運営委員・会計監査の選出と承認
 - (6) 2006 年度 活動方針案説明
 - (7) 2006 年度 予算案説明
 - (8) (6) (7) の活動方針案、予算案の質疑応答及び承認
5. その他
6. 議長解任
7. その他連絡事項
8. 閉会の辞

○ 講演会 10:30～12:00

学習会シリーズ 「慶應日吉キャンパスの戦争遺跡を知る」
第1回「図面から見た海軍省人事局地下壕」

講師 新井 揆博 氏

日 時 2006年6月10日(土) 9時30分 会場
場 所 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎2F 中会議室
主 催 日吉台地下壕保存の会

2005年度活動報告

2005 年度は不思議な、そして充実した年度であった。5 月に開かれた総会では敗戦 60 年としながらも例年と余り変らぬ活動方針が示されている。

しかし、港北区区政推進課から提示された「港北ふるさとサポート事業」に応募(6 月 25 日提案会)し、助成金を頂くことになる様相は一変した。事業内容は「ガイド養成講座」(5

回)を開催することと、戦争遺跡「ガイドブック」の刊行だが、2006年3月末までに事業を終えなくてはならず、時間に追われた。

ガイドブックは「戦争遺跡を歩く 日吉」として、2006年1月28日に刊行、近隣の小中学校に配布するため校長会に挨拶に回るなどし、大変喜ばれた。

講座は10月22日第1回の講演からはじまり、講演と見学会を行ない、2月18日第5回最終回はグループで討論し、結果をグループ別に発表した。講座はおおむね好評で、来年も引き続き「港北ふるサポ」に応募し、開講する予定である。

一方、7月の運営委員会で神奈川新聞社の「神奈川地域社会事業賞」に自薦応募することが決まり、過去16年間の事業内容資料を添付、応募用紙を提出した。9月23日の同新聞記事によれば、39団体の中から5団体が選ばれ、受賞することが決まった。2006年1月28日十菱駿武氏を招き受賞記念講演会とパーティを来往舎で開催した。

地下壕見学会は平成17年4月1日、慶大総務部、日吉キャンパス事務センターより「日吉地下壕入坑ガイドライン」が提示され、入坑の資格、傷害保険加入等、見直しがされた。崖くずれの修復工事が終わり4月30日から見学会を再開したが、7月11日～8月31日再度修復工事のため中止となり、9月24日の定例見学会より開始した。このような事情により10～12月は見学会が目白押しとなった。

本年度総会(2005年5月28日)では新井揆博副会長が「神奈川県の戦争遺跡」を講演、大変詳しい内容で「リスト一覧」には79箇所の戦跡が書き込まれている。

「平和のための戦争展 in 横浜」(5月27～29日)に例年通り展示参加した。

「川崎・横浜平和のための戦争展」は13回を迎え、川崎市平和館に場所を移して7月16・17日に開催し、アジアに視点をむけた講演、シンポジウムが行なわれた。

「戦争遺跡保存全国シンポジウム長崎大会(8月20～22日)」に9名が参加。

11月19日、日吉台小学校の「日吉台フェスティバル」にご招待いただいた。日吉台

地下壕と戦時中の日吉のまちが取り上げられ、劇と展示の2本立てであった。体育館での劇「演じます戦争のこと①地下壕の説明、②疎開について、③戦争を生きぬいた人の体験」。教室での展示・児童会室:「見せます地下壕のこと①地下壕のジオラマ、②地下壕についての展示」、6-1:「戦争当時の日吉と今の日吉(模型)」、6-2:「紙芝居で教えます地下壕のこと!」、6-3:「知っていますか? 日吉台地下壕のこと」などであった。地下壕の見学や地域の人々の話から劇を創作して演じ、大人も及ばぬ展示を教室いっばいに繰りひろげ、他者に伝える大切な仕事を立派にこなした力量に感激した。校長先生は「よくやってくれました」と語られた。

2006年1月27日、慶大に地下壕調査のため文化庁調査官他の来訪があったことに伴い、2月14日横浜市文化財課を訪問し事情を聞いた。文化財指定、その運用については文化庁より地域の文化財課に連絡があり、地域の状況など聴取があるので、地道な活動が必要とのことであった。

3月22日、文化庁にて磯村幸雄主任文化財調査官と戦跡ネットワークの代表7名が懇談をした。調査の進行・報告書刊行・戦跡指定検討会の状況を尋ね、要望を述べた。

4月15日「日吉キャンパス周辺を歩く」を運営委員とガイド養成講座参加者で実施。航空本部地下壕周辺は2003年3月頃からマンション建設で問題になっていたが、今回歩いてみると、開発は今のところ中断されている様子で、草に覆われていた。



報告者 中沢正子

日吉台地下壕保存の会

- ◆会員数：302名、8団体
- ◆定期総会開催：第17回 2005.5.28
- ◆運営委員会開催：6.17～06.6.1 15回
- ◆会報発行 4回 75号(7.1) 76号(9.30) 77号(2006.1.12) 78(5.13)
- ◆地下壕見学会：4.30～2006.5.27 38回 参加者：1748名
見学会中止期間：2004.10～2005.4.29、7.11～8.31
- ◆TV朝日スーパーモーニング 6.28放映 取材協力 6.20
- ◆「港北ふるさとサポート事業」6.25 港北区提案会、11.23 同中間報告会 06.3.11 同活動報告会
- *ガイドブック「戦争遺跡を歩く 日吉」編集・校正・相談等：8.4～06.1.16 17回 06.1.28 刊行
- *ガイド養成講座：第1回(10.22)「戦後60年、アジア太平洋戦争をどう考えるか」渡辺賢二講師、第2回(11.19)「日吉の戦争遺跡」①連合艦隊地下壕をはじめとする海軍施設 新井揆博講師、②日吉の空襲と学童疎開 喜田美登里講師、③大聖院と小嶋萬助 亀岡敦子講師、第3回(12.10)「日吉の戦争遺跡を歩く」1 連合艦隊地下壕、第4回(2006.1.14、大雨2.4に延期、12.26下見)「日吉の戦争遺跡を歩く」2 艦政本部地下壕他、第5回(2.18)「日吉の戦争遺跡を通して私たちが子どもたち・市民に伝えたいもの」グループ・ディスカッションと発表、講評 渡辺賢二講師。レポート提出
- ◆第13回川崎・横浜平和のための戦争展「昭和20年 戦争の記憶をひきつぐ」
日時：7.16～17 会場：川崎市平和館 参加人数：250名
主催：川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会、日吉台地下壕保存の会
展示：実物資料「登戸研究所等の未公開資料を含む」
絵画「市民が描いた戦争の記憶」
写真「神奈川県の戦争遺跡」日吉台地下壕、登戸研究所、蟹ヶ谷通信隊、その他の戦跡
複写「海軍作戦命令電文」
講演・シンポジウム：大日向純夫氏「アジアとの歴史対話の意義と課題」
中国・韓国の留学生を中心にシンポジウム「アジアにおける戦争体験の継承」
大原穰子・松尾敦子氏の朗読と語り
実行委員会：3.29～7.8 5回 準備作業：7.1、7.14～15
記者会見：川崎市記者クラブ 6.28
関連事業「あなたの戦争の記憶を絵に」絵画教室 6.11
- ◆日吉台地下壕写真展 7.25～29 於すとう信彦と市民政治バンド事務所
- ◆第9回戦争遺跡保存全国シンポジウム長崎大会 9名参加
日時：8.20～21 会場：「矢太楼」 8.22 フィールドワーク
分科会報告：「横浜・川崎の戦争遺跡の現状と保存運動の課題」新井揆博、岩崎昭司、喜田美登里
- ◆神奈川地域社会事業賞受賞(神奈川新聞社)表彰式 10.22 於パンパシフィックホテル。
記念講演会・パーティ 2006.1.28 於来往舎。講演：「戦争遺跡保存運動の意義」十菱駿武講師
- ◆NHK第1放送「きょうも元気でわくわくラジオ」の取材同時放送 2.23 取材協力 2.2
- ◆日吉キャンパス周辺を歩く 4月15日(4月1日下見)ガイド養成講座参加者に来年度へのつなぎとして開催。慶大キャンパス内第8校舎脇の理工坂周辺の人事局地下壕、まむし谷の連合艦隊地下壕入口向い側の構築物、日吉5丁目の航空本部地下壕などを見学した。

2005年度 決算報告

(単位 円)

費 目	2005 年度予算	2005 年度決算	備 考
【収入の部】			
会 費	220,000	221,000	133 名・4団体
見学会資料代	250,000	322,591	内訳別項
図書等頒布	0	59,050	
寄付金等収入	0	315,000	神奈川新聞地域社会事業賞副賞等
繰 越 金	311,356	311,356	
計	781,356	1,228,997	
【支出の部】			
運 営 費	120,000	150,621	
事 務 費	70,000	39,120	
印 刷 費	30,000	29,058	
通 信 費	170,000	144,590	
資 料 費	30,000	26,010	
頒布図書購入費	50,000	130,336	
交流・交通費	100,000	98,140	
謝 礼	30,000	25,000	
予 備 費	181,356	100,000	ふるさとサポート事業補助
計	781,356	742,875	
差引残高		486,122	

見学会開催費用内訳

収入の部		支出の部	保険料	152,400
見学会費用	535,100		振込手数料	4,690
			案内経費	55,419
			※資料作成費	322,591
合計	535,100		合計	535,100

※資料作成費は2005年度決算の見学会資料代に計上しています

以上の通り報告します

2006 年 6 月 10 日

日吉台地下壕保存の会

会 計

亀岡 敦子

印

この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査

熊谷 紀子

印

会計監査

山口 園子

印

2006年度日吉台地下壕保存の会 運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問

会 長 大西 章
副会長 新井 揆博 鈴木 順二

運営委員 岩崎 昭司 上野 美代子 大久保 隆 岡上 そう
 亀岡 敦子 喜田 美登里 桜井 準也 鈴木 高智
 谷藤 基夫 常盤 義和 都倉 武之 富澤 慎吾
 中沢 正子 中谷 俊吾 林 ちづ 古川 晴彦
 宮本 順子 茂呂 秀宏 渡辺 清

会計監査 熊谷 紀子 山口 園子

顧 問 永戸 多喜雄 鮫島 重俊 白井 厚
 東郷 秀光

2006年度活動方針—(案)—

1989年に日吉台地下壕保存の会が発足して、今年で18回目の総会を向かえます。多くの会員の方々、全国の戦争遺跡保存運動に携わっているの方々、日吉地域住民の方々とともに活動を行ってきました。

今年度は文化庁が『近代遺跡調査報告書』を刊行する見込みです。既に日吉台地下壕は全国の軍事に関する遺跡の50件に選定されております。この地下壕が歴史的に重要であることは言うまでもありませんが、国に近代遺跡として登録されことは大きな意味があります。

近代遺跡として登録されるために、我々も十分な準備をしなければなりません。一つは国民的理解、戦争遺跡の市民権をさらに得るために日常的に見学会を開催していくこと。また、我々自身もより深く理解し活動するために学習講座を開いていくこと、調査研究をして史跡指定に必要な資料を準備すること。その他にも指定促進活動を進めて行政に訴えていくことがあります。

また、小・中・高校生を始めとする多くの方々に対して見学会を開催し、それをガイドする方々を養成し、活動を広げると同時に持続させていきたいと考えています。

そのために以下の活動方針を提案致します。

活動方針

- 日吉台地下壕及び関連施設の整備・活用方法を考え、その実現に努力する。
- 日吉台地下壕見学会の内容を充実させ、より頻繁に開催する。
- 小・中・高校生のための見学会を開催していく。
- 日吉台地下壕の学術調査・研究及び学習会を開催する。
- 港北区住民の方を始めとする地域の方々と協力して保存運動を進める。
- 慶應義塾・横浜市・県・国への働きかけを地域の方々と連帯して行う。
- 全国の戦争遺跡保存の会との連携を深め、保存運動を盛り上げていく。
- 日吉台地下壕平和資料館建設を目指し、実現に努力する。
- 運営委員会の活動の充実と強化をはかる。

2006年度 予算(案)

(単位 円)

費 目	2006年度予算	備考
【収入の部】		
会 費	220,000	
見学会資料代	250,000	
図書等頒布	0	
寄付金等収入	0	
繰 越 金	486,122	
合 計	956,122	
【支出の部】		
運 営 費	150,000	各種会合・打合せ等
事 務 費	70,000	事務用品費等
印 刷 費	30,000	会報・資料等
通 信 費	170,000	会報郵送費
資 料 費	30,000	書籍・資料等
頒布図書購入費	50,000	
交流・交通費	100,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝 礼	100,000	講演・学習・調査等
予 備 費	256,122	
合 計	956,122	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました

2006年6月10日

日吉台地下壕保存の会

運営委員会

○講演会

学習会シリーズ 慶應義塾日吉キャンパスの戦争遺跡を知る

図面から見た海軍省人事局地下壕（要旨）

講師 新 井 揆 博

1 戦争末期海軍は日吉に巨大地下壕を造る

アジア太平洋戦争も1944年7月にサイパン島が米軍の手に落ちると、早晩、B29による日本本土空襲が予想され、慶應義塾日吉キャンパスの第一校舎に構えていた軍令部第三部は、一週間後に、海軍第300設営隊によって地下壕（待避壕）の建設を開始した（配置図②）。以後、新たに軍令部総長特命で編成された第3010設営隊は、第300設営隊の協力を得て、巨大な連合艦隊司令部地下壕（配置図①A）

の建設工事に入った。工事の一定見通しができた10月ごろ、第300設営隊は次の任務地に移動し、前後して、海軍省人事局の地下壕(配置図③)設営のために、東京地方施設事務所編成の柳瀬隊(隊長海軍技師柳瀬珠郎)が、民間建設業者鉄道工業(株)を協力作業隊にして地下壕建設に入った。それからは海軍省諸官衙の存在を偽装する意味合いをも兼ねて、連合艦隊司令部(日吉部隊と呼称)からの指示もあり、第3010設営隊は隊長名を冠して「伊東部隊」と呼称するようになった。人事局地下壕は、45年3月10日の東京大空襲前には完成し、人事局の大部分(約200名)が日吉に移ってきた。海軍省航空本部地下壕(配置図①B)は45年5月中旬に完成を見た。「日吉の丘公園」海軍省艦政本部地下壕(配置図④)は、45年1月に着工、8月14日に一応完成したといわれている。

厳しい戦況の中で

サイパン・グアム・テニアンなどマリアナ諸島の陥落によって「絶対国防権」は崩壊し、日本の防衛線は、小笠原・沖縄・フィリピンまで後退し、東条内閣は責任を取って7月18日に総辞職した。

後を引き継いだ小磯内閣は、国民の更なる戦意高揚をはかるため8月4日「国民総武装」を閣議決定した。その結果、全国の職場や学校で竹やり訓練が始められた。8月19日、御前会議において「今後採るべき戦争指導の大綱」が決定され、「捷号作戦」の準備が改めて確認された。

連合艦隊司令部が旗艦「大淀」から慶應義塾の学生が使っていた寄宿舎に入ったのは9月29日であった。10月に入ると、日本海軍は台湾沖航空戦に引き続くレイテ決戦で、神風特攻隊による体当たり攻撃など通常では考えられない手段をもって戦った。この決戦で連合艦隊は事実上壊滅した。海軍は地下壕に潜り、本土決戦を計画し準備を進めていった。兵器など物的戦力の補充がとどこおるなかで、人事局は人的戦力をどう補充するか、第一線部隊の兵士に対しては特攻精神とその戦術に依拠した「玉砕」を結果的に強要していった。



2 海軍省人事局

日吉に来た海軍省の部局

大臣官房、軍務局、兵備局(1945年3月1日、兵備局は軍務局に合体し、兵備局は廃止。ただし兵備局第4課所掌であった「労務、徴用、軍属船員」は人事局に移された。)、人事局、教育局、軍備局、医務局、経理局、法務局、建築局(建築局は1941年8月1日廃止、海軍施設本部に改組)を置き、大臣官房に文庫、調査課、電信課を置いた。

その他、海軍大臣直隷の機関として海軍艦政本部、海軍航空本部、水路部、海軍施設本部、があった。

(上記ゴチックの部局は日吉に来た部局)

当時の海軍省人事局長は

発令日	階級	氏名	
1943年 6月 5日	海軍少将	三戸 寿	海兵42期
1945年 5月 7日	海軍少将	大野竹二	海兵44期
1945年11月24日	海軍少将	川井 巖	海兵47期

人事局では何をやっていたか(1940年11月以降)

軍人(士官及び准士官の一部)、文官の補職、配員、任免、下士官、兵の任用進級に関すること。

戦時充員計画に関すること。

軍人、文官の補充及び分限に関すること。

軍人の服役に関すること。

兵の徴募に関すること。

依託学生、生徒、予備員候補者の採用に関すること。

(戦史叢書『海軍軍戦備』<1>21頁)

功績調査部

人事局は1942年7月14日功績調査部を設置し、日中戦争勃発以後諸作戦、戦闘、諸戦務に従事

の軍人、軍属の功績調査を行い、功績顕彰の基準を作製し功績顕彰案を遂行した(功績調査部は45年4月15日に空襲で焼かれるまで日吉台国民学校で執務していた)。

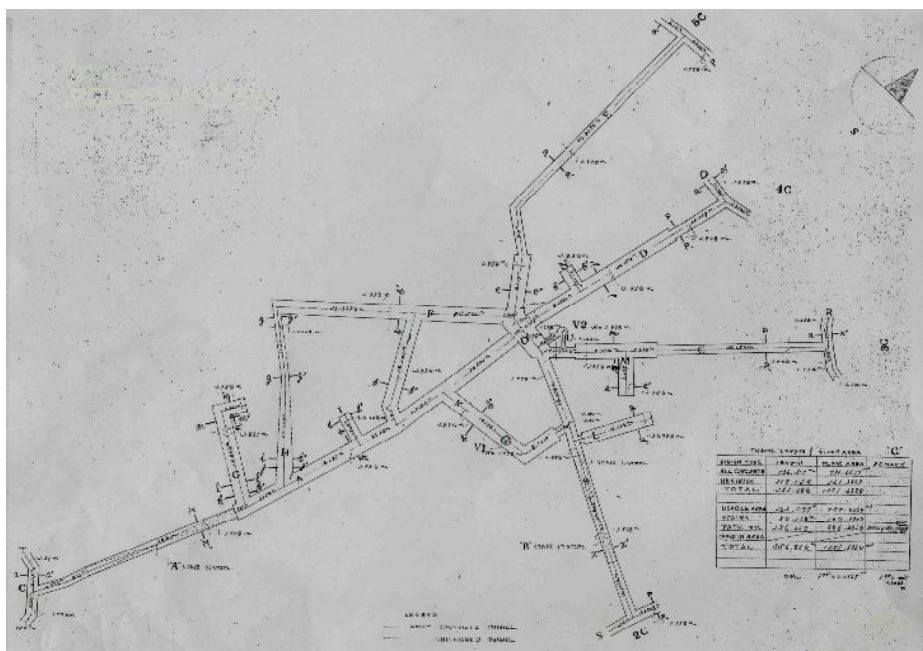
3 海軍省人事局地下壕

海軍省人事局地下壕の図面について

ここに紹介する図面は、現在慶應義塾日吉キャンパス第8校舎の東側に所在する「海軍省人事局地下壕」について、大学当局が製作した1955年9月22日付「PLAN OF "C" BLOCK設計図」「BLOCK PLAN BLOCK "C" 設計図」「CROSS SECTIONS BLOCK "C" 設計図」の一部であるが、これら地下壕の図面は、松田平田設計事務所が作製したものを基につくったようだ。

防衛研究所図書館所蔵『旧陸軍私設関係綴』(日本兵器工業会資料<昭和47年>)の別紙「旧海軍の設けた地下施設について(追加報告)」によると、「…尚日吉地区にあった海軍省地下施設については、1949年1月に米第八軍の命令により株式会社松田平田設計事務所(本社東京都千代田区内幸町二ノ三幸ビル六階)が実測した図面を同社の好意により当部で借用、之を複製することを得たので附図として添付提出する。」と記述され、延長・面積などほぼ一致している。

また、3010設営隊長であった伊東三郎は、『海軍施設系技術官の記録』同刊行委員会(1972年)のなかで、「昭和25年～26年の朝鮮事変で一時米軍の危機があった際、当時横浜生糸試験所に駐屯していたアイケルバーカー大将率いる第一騎兵師団本部が、日吉の地下施設利用計画立案のための予備調査測量を、当時米軍に最も信用の厚かった松田平田設計事務所に依頼があったとかで、その案内をひきうけて日吉部隊・航空本部使用の地下施設戦跡を巡回案内したことがあった」とのべているところからも松田設計事務所によるものと考えられる。



PLAN OF "C" BLOCK 設計図(1955年9月22日製作)

人事局地下壕の規模と構造(前掲1955年9月22日付 設計図)

完成状況	延長	床面積
コンクリート覆工部	336.53m	790.4637㎡ (8782.93平方呎)
未完成(素掘部)	217.154m	561.2247㎡ (6235.83平方呎)
合計	553.684m	1351.6884㎡ (15017.86平方呎)
使用可能規模	243.379m	757.4049㎡
階段	54.228m	107.3907㎡
通路等	256.027m	486.8928㎡
合計	556.834m	1351.6884㎡

地下壕の構造(「PLAN OF "C" BLOCK設計図」参照)

人事局地下壕は5つ(1C～5C)のY字型入坑部を持ち、AからOまでの坑道と各部屋から構成され、入口の坑道部分は全て幅2m高さ2.1mになっている(断面図a参照)。AとBの坑道には緩やかな階段を備え、壕の中心部Oに続いている。Oの近くにはV1の堅穴坑とK坑道にはV2の堅穴坑があり空気

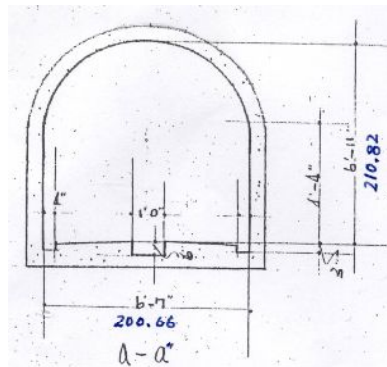
調整の役割を果たしていた。なお、G・Hの坑道は素掘りになっているが、その他の坑道は全てコンクリートで覆工され水性ペイントで2回塗り仕上げしている。

A-坑道 (T-O) 94.5m

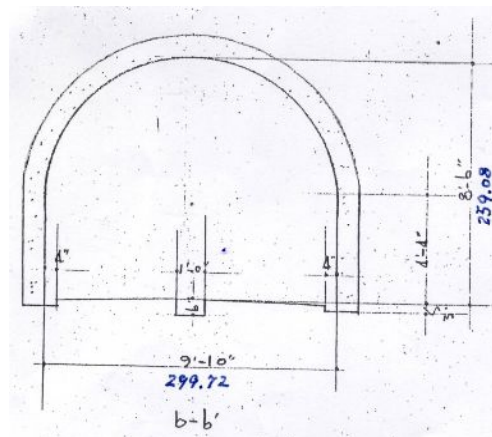
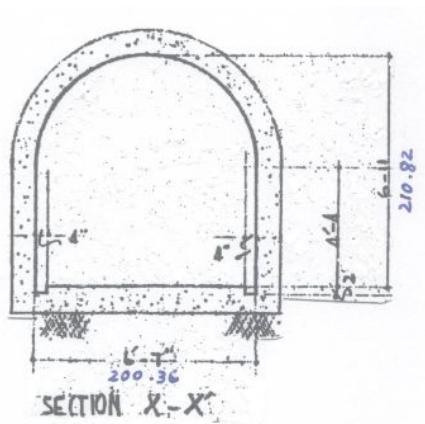
日吉記念館の東側、T入坑部(標高17.8m)から入って約10m進むと、高低差7m・72段の階段(A階段とx断面図参照)があり、階段を下りたところから、幅約3m、高さ約2.6mの坑道(断面図b参照)がOまで61m続く。階段を下り左に素掘りのG・H坑道の入り口がある(断面図L・j参照)。その先左に幅・高さともに約2.5m、奥行き約5mのI室(断面図d参照)があり、坑道FにつながるJ坑道の入り口(断面図b参照)と右側にB坑道につながるK坑道(b参照)がありO(標高10.8m)に至る。



日吉記念館東側コンクリート構造物
(T入坑部か?)



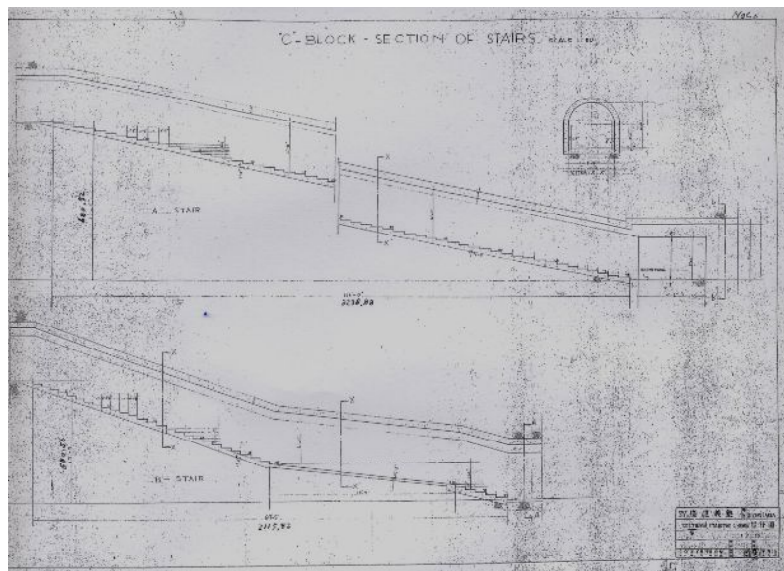
全入坑部共通の断面図坑道の両側に約10cm幅の溝があり、真ん中に幅約30cm深さ約15cmの溝がある。

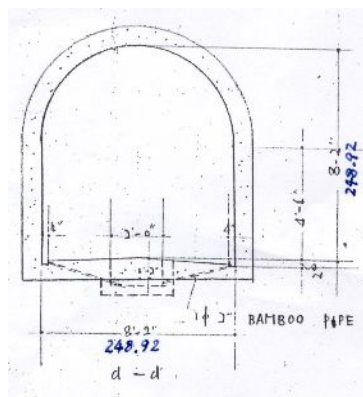


A・B坑道の階段部断面図で幅2m、高さ2.1mのトンネル状の階段になっていた。

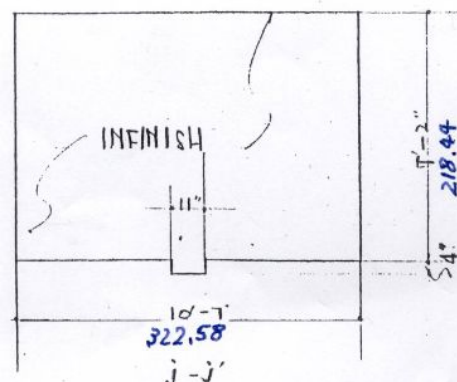
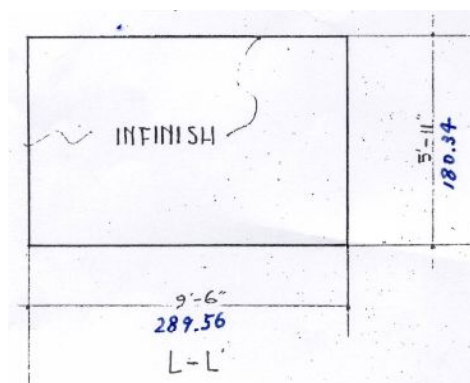
A・J・K坑道とN室も同じ断面になっている

A・B坑道の階段断面図





I室には内部に幅約60cm深さ35cmの排水溝があり、直径5cmの「竹管」が配管されていた。B坑道のF室と共通した断面になっている。



G・H坑道(断面図L・j)は素掘りになっていたが、この部分は第8校舎建設時(1971～72年)にF・I・J坑道の一部とともにコンクリートの基礎杭と気泡コンクリートによって充填され埋めたてられたといわれている。

B坑道(S-O) 64.41m

第8校舎から北東方向に約70m斜面を下ったところに標高18.6mに位置するS入坑部(断面図a参照5頁)がある。B坑道を15mほど入るとOに続く高低差5.18m、長さ21.16mの階段(途中7.44mの平らな部分がある)になっている。階段を下りた右側には、幅約2.5m、奥行12.5mの比較的広いL室がある(断面図d参照6頁)。その先の左側にA坑道につながるK坑道がある。鍵の手になっていて途中に堅穴坑V1がある。



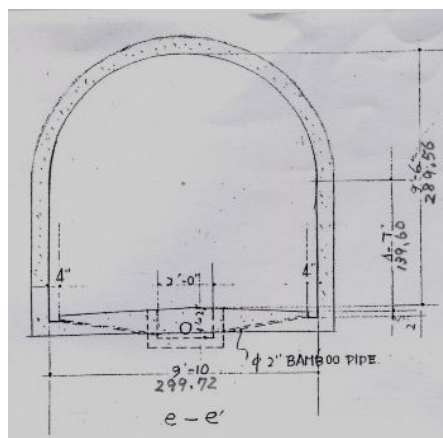
B坑道入坑部



C坑道入坑部

C坑道(R-O) 64.36m

R入坑部(標高10.31m)からO部まで64.36mあるが、途中35m入ったところから約15mは、a断面構造をもつ坑道よりも一回り大きい幅・高さ約3mの坑道になっている(e断面図参照8頁)。しかもこの部分の左側に、eと同じ断面をもつ奥行き約7mのM室がある。そしてOの手前を右に入るとV2の堅穴坑がある。



C・E坑道の一部断面図だが両側に約10cmの溝があり直径約5cmの竹管が中央部の柵型排水溝(61cm四方深さ35.6cm)に配管されている。

D-坑道(Q-O) 49.6m

Q入坑部(標高10.34m)を18mほど入ると**O**部まで33m続く四角くコンクリートで覆工された坑道(幅約3.23m×縦2.19m断面図**j**参照7頁)になっている。それから**O**に向って右側には幅約3m奥行き約5mの**N**室(断面図**b**参照5頁)がある。この部屋は人事局長の執務室であったという。この部屋の前に、当時、若林主計兵曹長の机が置かれていた。



D坑道入坑部



E坑道入坑部

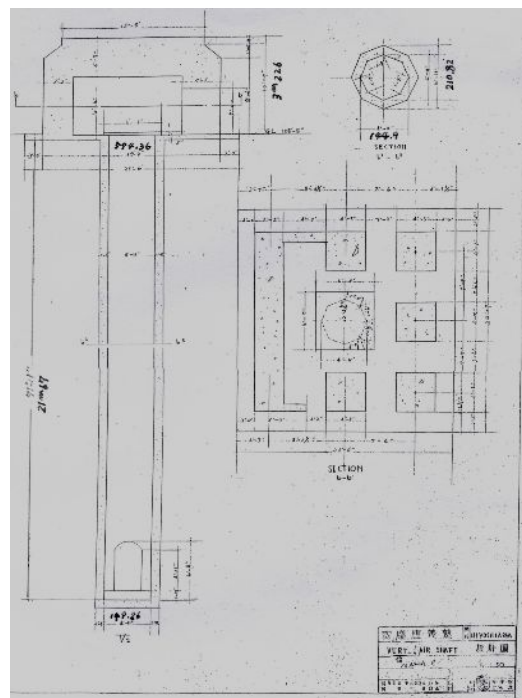
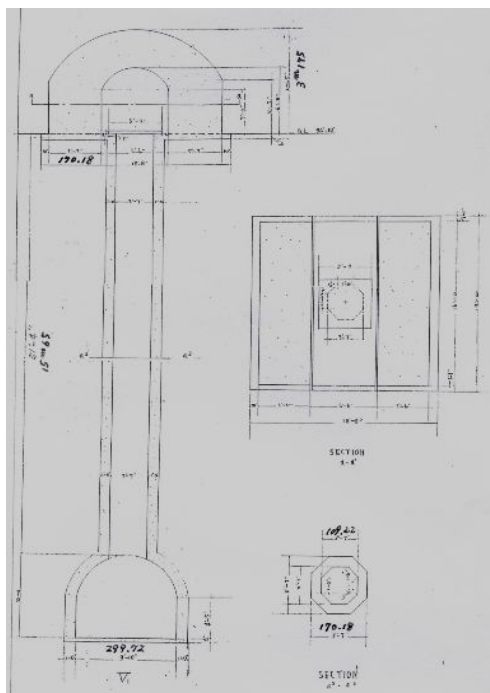
E-坑道(P-O) 67.8m

P入坑部(標高9.55m)から幅2m高さ2.1m(断面図**a**参照5頁)のほぼ平坦な坑道を約60m進むと幅・高さ約3mの坑道(断面図**e**参照)が8mあり**O**に至る。

なお、**F・J・K**の坑道は直接入坑部をもたないが、ともに**b**断面(5頁)をもった構造になっている。

V1 堅穴坑とV2 堅穴坑

V1・V2の堅穴坑は、土被りが15mから21mあり、地上部分の耐弾構造物も頑丈に設計され、人事局地下壕が極めて重視されて造られていることがわかる。空気坑としてつくられたものと考えられるが、八角形の煙突状になっている。

**戦後も「空気流通坑道」の工事を進めた**

3010設営隊は、敗戦直後人事局首脳部からの要請で「空気流通坑道の貫通を要望」され、工事完了次第、作業従事隊員は即刻復員することを前提条件で、戦争中にも増して昼夜後退作業の急ピッチは好調に進み、作業開始後旬日ならずして導坑は貫通した。

(『海軍施設系技術官の記録』同刊行委員会 1972年 306～307頁)

4 人事局地下壕にきた人々

川井 巖 (1896年9月2日～1972年5月15日) 享年77歳

発令日	階級	補任／任官
1940年	海軍大佐	
1943年10月 4日		軍令部出仕／海軍省出仕(人事局一課)
11月18日		人事局第一課長
1945年 4月 1日		人事局第一課長／第三課長
5月 1日	海軍少将	
6月 5日		人事局第一課長
11月24日		人事局長／第一課長／第三課長
11月30日	予備役	充員召集
12月 1日	第二復員官	第二復員省人事局長／人事局補任課長
1946年 6月15日	充員召集解除 復員事務官	復員庁第二復員局人事部長／人事課長
1947年 1月 1日		復員局第二復員局残務処理部長
5月31日		引揚援護庁復員局第二復員局残務処理部長
1950年 8月16日		依願免

若林繁雄 (海軍人事局主計兵曹長)

1936年、19歳で海軍に志願入隊し敗戦まで兵役を勤めあげる。

1943年、海軍経理学校？

本人の記憶では、45年3月10日の東京大空襲の前に人事局の大部分が日吉に移ってきたという。現高校校舎北側2階に鉄製2段ベットがおかれ宿泊していた。朝8時になると人事局地下壕に行き夕方まで仕事をした。つい立をはさんですぐ隣に人事局長(川井巖・少将)の部屋があった。人事局には200人ぐらいいて、軍人は校舎に宿泊、理事生10人ほど(20歳位)は通勤していた。

若林氏は充員計画といって兵員の割り振りの仕事をしていた。人事局は士官(予備士官も含む)の人事を中心に扱い、少佐以上の人事は海軍省で扱った。通信など特殊技能者がやられるので補充しなければならない。これらの兵を飛行機で送らなければならない。飛行機は上官が乗るので下のものは乗れない。仕方なく船で送るが途中で撃沈された。これが繰り返され、無駄なことをしていたとも延べている。敗戦に伴って多くの書類は焼かれたが、残った書類とともに45年8月下旬に、補修された海軍省に戻った。12月1日退役、その後復員省で残務整理をしていた。

日吉には海軍省経理局もきていた

経理局の所掌事項

予算及び決算に関すること。

契約事務の統制及び契約の実施。

主計科士官の本務に関すること。

集中購買、物資の調達配給及びこれに必要な調査。

船舶の徴傭契約の関すること。

(戦史叢書『海軍軍戦備』<1>24頁)

経理局の編成

第一課、第二課、第三課、契約部(第四課、第五課、第六課)から編成されていた。

昭和21年3月1日契約部を新設した。経理局第四課は契約事務の統制、各庁所要品の集中購買を、第五課は契約の実施、物資調達配給とこれに必要な調査を、第六課は工場事業所の軍需品、原料、材料に原価計算、工場事業場の経理に関する事項をそれぞれ担当していたが、契約事務がとみに激増したため、契約部を設けてこれら三課の事務を総括することとなったものであった。

戦史叢書『海軍軍戦備』<2>325頁)

千葉朝夫

1930年、20歳で海軍に志願し横須賀海軍経理学校に入校。卒業後、戦艦「長門」に乗船。その後、各隊勤務を経て、三沢航空隊から44年7月1日海軍省に経理局主計課士官として赴任。日吉には海軍省経理局第三課、総勢250～260名と共にきた(月日不詳)。そして艦隊経費を管理・物品会計などの仕事をしていた。艦船が沈んでも経理上後始末するため必ず報告することになっていた。ミッドウエー海戦で大損害を受けたときも帳簿上から分かった。出納帳は敗戦直後焼却した。経理局第二課(40名ぐら

い) きて共済・年金関係の仕事をしていた。

経理局には武官と文官とがいて、第三課には佐官が3人、尉官一人(千葉氏)いた。日吉では武官が千葉氏一人で他は文官であった。最初は男子が経理の仕事をしていたが、出征していったため女子が増えていった。女子挺身隊が150～160人ほどいて、理事生・筆生として仕事をしていた。偉い人の娘さんが多かった。

千葉氏はマムシ谷のテニスコートでよくテニスをしたという。空襲の時は放送があり校舎の近くの地下壕に入ったという。当時防空指揮官をしていた。この地下壕は、高さ2m、幅2mぐらいで、コンクリートのところや素掘りのところがあった。45年5月ごろ、第一校舎(現高校)前で、皆に話しをしていて、グラマンに撃たれたことがあった。このグラマンは田圃に撃墜され乗っていた兵士が目隠しをされて連れてこられた。

敗戦の日、本土決戦をやるというので、妻を切り、自分も死ぬつもりでいた。校舎の中庭に全員集めて「玉音放送」を聞いた。聞き終わって、20分ぐらい茫然自失の状態であった。いつの間にか300人近くいた人がみんないなくなっていた。

副官から書類を焼けという命令が来た。現金出納帳はじめ、全ての書類を全部焼いた。その後、GHQから電話がきて、戦争経費を報告しろと命令を受けた。部下と記憶を頼って報告した。

日吉にいたとき、人事局と軍令部の一部分がきていることは知っていたが、連合艦隊司令部がきていることは知らなかった。

(慶應義塾教職員版ニュース『せいきょう』50号)

5 第8校舎建設に伴う地下壕の変容

慶應日吉第8校舎の建設は、1976年8月に開始、77年5月に竣工した。この基礎工事に伴い人事局地下壕のF・G・H・I・J坑道部分は、直径1m位あろうか鉄筋コンクリートの抗柱が打ち込まれ、気泡コンクリートで埋め立てられた。下記添付写真は、76年当時の人事局地下壕の状態を伝える貴重な写真である(慶應義塾所蔵)。



76年8月25日撮影 撮影場所不詳(Oの近くか?) 地下水が溜まっている。



76年9月6日撮影 地下壕の天井はダイヤモンドカッターで大きな穴が貫通された。



76年10月5日撮影 1mの直径鉄筋コンクリート抗柱が打ち込まれた。

第10回戦争遺跡保存全国シンポジウム

谷川岳を仰ぐ、いで湯の里みなかみで開催

大会要項発表さる。多くの方の参加を！

昨年の長崎大会に次いで今年も全国大会の季節がやってきました。今年は、群馬県みなかみ温泉で8月19日(土)～21日(月)3日間に渡って開催されます。日吉台地下壕保存の会は戦争遺跡保存全国ネットワーク設立団体のひとつとしてこの大会に当初から参加してきました。今年は第10回の大会として、海外の中国、韓国、マレーシアから研究者をお呼びしてシンポジウムが開かれます。世界史の中でアジア太平洋戦争とは何だったのかという重い課題が少しでも明らかになるのではないかと思います。

10年目の節目の年に、雄大な谷川岳を仰ぎながら温泉につかり、戦争と平和、戦争遺跡の保存について御一緒に考えましょう。多くの方々のご参加をお願いいたします。

記

1. 場所 「松の井ホテル」群馬県みなかみ町湯原551 TEL0278-72-3200
2. 日程 2006年8月19日(土)～21日(日)3日間

詳細は同封のプリントをご覧ください。申し込みは個人で申し込まれても構いません。その場合は会の方にも申し込まれた旨ご連絡いただければ幸いです。

また会としても団体申し込み致します。

締め切り 7月31日まで

申し込み及びお問い合わせ先 亀岡敦子 宛

〒223-0064 港北区下田町5-20-15

Te l & F a x 045-561-2758

○現職の文科相、戦争遺跡を視察！

信濃毎日など各紙によると小坂文科相は6月11日(日)地元の高校生の案内で長野県の松代大本営地下壕を視察しました。現職の閣僚が戦争遺跡を視察するということはこれまでなかったことだと思います。ただし文化庁、山下調査官は、国の史跡指定は地元の申請が原則であり、(文科相の視察によりすぐに史跡指定されるという)そのような話は聞いていないという見解を述べたと松代大本営の保存をすすめる会からの報告が保存の会に届いています。

(信濃毎日新聞2006.6.12)

3/12 総合 信毎 2006年(平成18年)6



松代大本営地下壕維持できる環境を

史跡指定 前向き発言

文科相視察

小坂憲次文科相は、一定の前提となる調査を完了したのぎつかけで、十一日、第二次大戦末期に掘削された長野市松代の大本営地下壕(二)を、長野県立高松市郷土研究班の生徒の案内で視察した。現在、同地下壕は文化庁が国史跡指定を視野する小坂文科相を視察する小坂文科相が、長野県立高松市の生徒(右)の案内で、大本営地下壕を視察する小坂文科相が、長野市松代町

一定の前提となる調査を完了したのぎつかけで、現、壕内では班代表の右(右)に掘削された(二)の生徒は、工事の進め方や犠牲になった朝鮮人労働者の様子などを、証言を基に説明した。小坂文科相は「当時の壕が自分で見ているように想像できた。先軍を引継ぎ、人を認める力を持っている」と生徒をねぎらった。視察後

小坂文科相は記者団に「(地下壕は)事実を伝える表現的な意味が非常に大きい。(史跡指定の中に組み入れていく可能性は十分あると思う。(文化審議会には、私なりに見た感想を伝えるようにしたい)」と述べた。

国内の軍事関係の遺跡としては、広島市の「原爆ドーム」が史跡指定されている。史跡指定は、文化庁の調査報告を基に文科相の諮問を受けた文化審議会が答申する。

● 活動の記録 2006年5月～6月

- 5/13 第14回運営委員会 会報78号発送(慶応高校物理教室)
- 5/20 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民センター)
- 5/25 平和のための戦争展 in よこはま 会場設営(かながわ県民センター)
- 5/26 地下壕見学会 日本セカンドライフ協会 37名
- 5/26～28 平和のための戦争展 in よこはま開催(かながわ県民センター)
「戦争展10周年 5月29日・横浜大空襲から61年 見つめよう!語り合おう!
戦争の過去といま」展示・朗読劇・映像とトーク 3500名来場
- 5/27 5月定例見学会 66名
- 5/31 地下壕見学会 慶応義塾高校1年 42名
- 6/1 第15回運営委員会(日吉地区センター)
- 6/5 地下壕見学会 川崎市立日吉中学校2年 91名
- 6/9 地下壕見学会 慶応義塾高校1年 84名
- 6/10 2006年度定期総会(来往舎中会議室) 講演会 「図面から見た海軍省人事局
地下壕」 講師 新井揆博 氏
- 6/16 地下壕見学会 慶応大学文化人類学受講生(桜井準也先生) 144名
- 6/17 『港北ふるさとセンター事業』公開提案会「港北学び舎」開催 16団体が参加(慶
応大学来往舎 シンポジウムスペース) 日吉台地下壕保存の会は「ガイド養成講座」
など、「ピースロード・ふるさと港北 Part 2」を提案、助成金12万円
- 6/20 地下壕見学会 郷土史友の会 44名
- 6/24 6月定例見学会 63名
- 予定
- 7/5 運営委員会 会報79号発送(慶応高校物理教室)
- 7/22 7月定例見学会・7/29 7月定例見学会(7月は2回実施します)
- 8/12 8月定例見学会

▲定例見学会は毎月第4土曜日に行っています。なお日程が変わる場合もありますので
必ず見学窓口に申し込んでください。(見学申込先 TEL&FAX045-562-0443 喜田)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://www.geocities.HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上
発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会